◆第8回　牛群検診の目的と有効性

～「農家のやる気」が牛群検診の成否の最大のポイント～

牛群検診の大きな目的は“牛が持って生まれた生理的機能を無理なく最大限に引き出す”ことです。

具体的には、

〈1〉産乳成績の向上
〈2〉繁殖成績の向上
〈3〉病気の発生の減少

――の3点をすべて達成することです。

では具体的に何をするかというと、

〈1〉飼養管理方法の聞き取り
〈2〉粗飼料分析と飼料診断
〈3〉病気の発生状況の調査と解析
〈4〉乳検データ（乳成分、繁殖成績）の解析
〈5〉13項目にわたる血液検査とその解析
〈6〉ボディコンディションとルーメンサイズの評価
〈7〉環境評価（まだ強くは押し出していませんが）

――などを行います。

診断結果の解説と飼料設計の修正には2軒で4時間はかけて、じっくりと行います。

実施に当たって最も重要なことは何でしょうか？　それは「農家のやる気」です。

現状に満足せず、今の牛群をなんとか改善したいという強い意欲が、牛群検診の成否の最大のポイントになります。

諸般の事情により現状を変えられない農家あるいは現状で満足している農家は、牛群検診の対象としては適切ではなく、健康診断としての検診が適当です。

確かに設備が不備でそれが足かせになっている農家もあります。しかし、それでも生産効率の向上は図れます。むしろ現状で最大限の努力ができないで、設備投資で切り抜けようとする考えが問題です。

飼料設計を全面的に受け入れた農家は、数カ月で乳量が10,000キロ前後になっています。また、1頭当たりの年間収益（機械の減価償却と人件費を除く）が50,000円くらいの農家でも、数年で200,000万円くらいになっています。

しかし、こちらの指導を参考にしかしない農家は、最初に乳量が少し伸びますが、その後は何回続けてもあまり変化がありません。

農家の意識と行動が変わらなければ、いくら周りが手間暇かけても生産性の上がるはずがありません。世代交代など、農家ごとの諸事情もあるでしょうが、時代の流れは今までのようにはゆっくりしていないことを認識する必要があります。

農業共済新聞　岩手版　2003年3月2週号より